

Title	クィア映画祭によるSOGI の理解に対する変化
Author(s)	新尋, 開理
Citation	平成30年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書
Issue Date	2019-04
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71915
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平成 3 0 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏 名	にいひろ かいり 新尋開理	学部 学科	文学部人文学科	学年	1 年
ふりがな 共 同 研究者氏名	さかもと まいか 阪本舞香	学部 学科	文学部人文学科	学年	1 年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	東志保	所属	文学研究科		
研究課題名	クィア映画祭による、SOGI の理解に対する変化				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				

はじめに

本研究の目的は、クィア映画祭がどれほど SOGI の理解を深めるのかということを明らかにする点にある。まず初めに、SOGI とは、Sexual Orientation & Gender Identity の略である。日本語にすると性的志向と性同一性となるこの場合、対象となるのはセクシャル・マイノリティに限らず、すべての人がその範疇に含まれる。

さて私たちがこの研究を始めた経緯について簡潔に述べる著者である私（新尋）は、小学生の頃から、給食や学級活動の時間に、先生が自由にグループを作れ、と指示すると必ずといっていいほど男女にはっきり分かれることに疑問を抱いていた。自由にグループを作ればいいなら、男女混合のグループが存在していても何もおかしくないはずだからだ。では、皆が同性の友達しか持たないのかというと、そんなわけではない。休み時間になれば隔てなく気さくに話し合う仲だ。しかし、いざ先生がグループを作れと指示すると、その仲の良さはどこ吹く風である。この不思議な体験をきっかけに、私は女性権運動に興味をもった。女性の社会的な地位が虐げられていることの理由が知りたかった。

そんな中、今年の 5 月にクィア映画の存在を知った。そこには通常の心身ともに男女と分ける概念に限られず、心は女性で身体は男性であるような人や、その逆など、多様な性差が存在する。そしてクィア映画祭とは、クィア映画を上映することで性の多様性について鑑賞者に喚起を促す催しであり、ここには通常の固定観念を取り払える可能性が秘められている。

クィア映画祭がどれほど SOGI の理解を深めるのか。このことを調べるため、大きく分けて 3 つのを行った。

はじめに、国内で行なわれているクィア映画祭を比較する目的でレインボーリール東京と関西クィア映画祭へ。そして、映画祭という観点から比較するために東京国際映画祭へ訪れた。次に、先行研究を調べた。まず、「クィア映画祭」を「クィア」と「映画祭」に分け、それぞれについて調べたのちに「クィア映画祭」に関する先行研究をみた。最後に、日本国内の各地方で行なわれているクィア映画祭のテーマについて調査した。そして最後に、世界でクィア映画祭がどのように取り上げられているのかを調べた。

なお本論文では、第 1 章で先行研究について紹介したのち、第 2 章で実際に参加した三つの映画祭について述べ、第 3 章で各映画祭のテーマ調査の結果、そして第 4 章で世界のクィア映画祭について紹介してゆく。以下がその成果である。

第 1 章 クィア映画祭とはなにか

まずは、「クィア映画祭」について語る必要がある。「クィア」については河口和也の『クィア・スタディーズ』、アン・ペレグリーニの「立ち上がれ女性たち。男たちは脇へ。けれど勇敢な人もいる。」を。「映画祭」については、トマス・エルセッサーの、*European Cinema: Face to Face With Hollywood*、そしてスカディー・ロイスの *Queer Film Culture: Performative Aspects of LGBT/Q Film Festivals* を。「クィア映画祭」については、『銀星倶楽部』と、管野優香の「クィア・LGBT 映画祭試論 映画文化とクィアの系譜」（『現代思想 10 LGBT—日本と世界のリアル』所収）を参照した。

第1節 「クィア」について

河口和也の『クィア・スタディーズ』（2003）によると、

「クィア (queer)」とは、「変態」「オカマ」などを意味し、非異性愛者を差別的に叙述したり、またそうした人びとに対して「揶揄」あるいは「非難」の意味をこめて投げかけるための、歴史的には英語圏に起源をもつ言葉であった。(同書,p.iii)

という。この言葉が運動や学問領域で使われるようになったのは、1990 年代からで、その契機としては「集約」と「連帯」という要素が挙げられる。(河口、pp.iv-vi)

まず「集約」については、セクシュアリティがゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、パンセクシュアルと、細分化されてゆくなかで、それを統合するための意味として「クィア」が使われた、ということを示している。また「連帯」とは、1980 年代のエイズが流行とセクシャル・マイノリティが結び付けられていた状況の中で、彼らが結束するための言葉として用いられたのである。

1990 年代には、クィア理論と呼ばれる研究領域が生まれた。ここにおいて、「同性愛/異性愛の二元論によって異性愛から同性愛が分離され、互いに対立的な位置に配置されているが、それは両者が対等な関係に置かれるのではなく、むしろ異性愛という規範を生成するために同性愛を構成的外部として位置づけるだけのことである。したがって、問題にすべきは、こうした同性愛と異性愛を分けて配置する二元論的権力自体であるということ」(河口,p53) なのだ。ジュディス・バトラーによると、

ジェンダーとは、身体をくりかえし様式化していくことであり、きわめて厳密な規制的枠組みのなかでくりかえされる一連の行為であって、その行為は、長い年月のあいだに凝固して、実体とか自然な存在という見せかけを生み出していく。(バトラー,1990,p.72)

従来のジェンダー観を相対化したバトラーの理論は、まさに攪乱の波を生むことに大きく貢献した。

しかしながら、アン・ペレグリーニは、セクシュアリティとジェンダーを分けたクィア理論は、レズビアンおよびゲイ研究だけでなくフェミニズム研究にも有意義だったと評価しているが、セクシュアリティとジェンダーを分けたことはやがてはクィア理論とフェミニズム理論を分離しかねないと危惧する。そして、クィア理論がセクシュアリティ専門、フェミニズム理論がジェンダー専門となると、ジェンダーとセクシュアリティが互いを区別する理論を探究し、実践を困難にしてしまう。さらにこれは、人種に関する議論をも止めてしまうという。(ペレグリーニ,1996) なぜなら、「ジェンダー、人種、セクシュアリティが相互に構築し構築される手法を概念化し、取り組むことを可能にする理論または戦略を、前進させるのではなく、実は阻害することになりかねない」(ペレグリーニ,1996,p251) からだ。したがって、ペレグリーニは、最後に新たなクィア理論の必要性を説いている。

また、「レズビアン」や「ゲイ」を「クィア」と集約することは、両者の個別的な問題をかき消してしまう可能性がある。(河口,p58)

クィア研究者たちがこれらの危険性を意図してつくりだしたわけでは無いだろうが、今後の研究のためには重要な批判である。

第2節「映画祭」について

次に、映画祭とはどのようなものだろうか。

まず、映画祭とは「映画の祭り」であるわけだが、そもそも祭りとはどのようなものであろうか。エルセッサーはこのように言う。

祭りとは、コミュニティが自らを祝福する瞬間である。それは、新年のはじまりを祝ったり、豊作を喜んだり、断食の終わりを記念したり、あるいは、ある記念日を祝ったりする。祭りには、開催する機会や会場、それから多くの人が欠かせない。

(Elsaesser,2005,p94)

エルセッサーいわく、それは映画祭においても同じである。ただし、人との交流においては、映画祭は多くの秘密や明らかな階級、そして特殊な決まりをもっており、その点、映画祭は祭典や儀式と似ているという。(Elsaesser,p94)では、祭りと祭典や儀式はどのように違うのか。エルセッサーはこう続ける。

人類学においては、祭りと祭典や儀式との区別は、何よりも、各々の観客がもつ役割である。もしも映画祭を謝肉祭と同様に捉えるとすると映画祭の方が、観客が活発的であると言えるし、祭典と比べると映画祭の方が消極的である。ある種の映画祭の排他性は儀式に似ている。それは運営者が自分と似たような境遇の観客を対象とし、その他多くの人から一線を画すからである。(Elsaesser,p94)

このように、映画祭の特徴のひとつは観客にあるといえる。しかしながら、映画祭を語るうえで観客に言及するだけではまだ不足しているであろう。なぜなら、映画祭は様々な要素を含む多元的なイベントだから。管野優香はこのように言う。

映画祭において、作品の上映は、あくまでこの社会空間を構成するひとつの要素にすぎない。会場へ出かけてゆく段取りから、上映後にロビーで出会う人びとのたわいないおしゃべり、上映後のトークや、ディスカッション、シンポジウム、さらには、映画祭後のパーティや懇親会を含め、それらのすべてが、映画祭という社会空間と経験とを醸成するのである。この社会空間こそがコミュニティと呼べるものではないだろうか。(菅野,2015,p207)

以上より、映画祭というコミュニティは、観客、作品、その他劇場の外で起こっていることなど、さまざまな要素から成り立つといえる。

では、映画祭という空間では、どのようなことが起こっているだろうか。スカディー・ロイストはこのようにいう。

映画祭はいくつかのレベルにおいて、パフォーマンス的な効果が影響を及ぼしている。一方のレ

ベルにおけるパフォーマンスとは、人類学的な意味での儀式、すなわち、規則や規範あるいはスクリプトに従うことを意味する。そしてパフォーマンスは、映画的な意味での演技すなわち、短時間あるいは日常的に起こることを役者の身体的な動作を意味する。他方のレベルでは、映画祭はバトラーのいう「遂行性」という意味でパフォーマンスな催しなのである。つまり、それは反復性の効果によるパフォーマンスである。この意味において映画祭は、常にそれまでに行われた映画祭を、規範や規則を、本書の 3-3-1 の中で説明される映画祭の定義（注 1）のような「映画の典型」を暗にほめかすのである。（Loist, p.40）

（注 1）ここでいう映画祭の定義とは、映画祭を演出することでそこに思わぬ偶然性が生まれることにある。偶然性はつねにすでに批判を生む可能性がある。つまり、映画を観ていく中でバトラーのいう攪乱の可能性が含まれるのである。

以上のことをふまえたうえで、次にクィア映画祭とはなにか、について考察する。

第 3 節 「クィア映画祭について」

「クィア」についての説明から分かるように、現在のようなクィアの語法は 1990 年代以降から使用されるようになった。そしてレズビアン&ゲイ映画祭だけでなくクィア映画祭という呼び名が出てきたわけだが、名前が変わっても内容について大きな変更点はなかった。そのため、1990 年代以前のクィア映画祭の歴史は、レズビアン&ゲイ映画祭の歴史であるといえる。それをふまえたうえで、「レズビアン・フィルムの現在・過去・未来」『銀星倶楽部 17 クィア・フィルム』を参照する。とちぎあきらによると、彼自身が意識的にゲイ及びレズビアン映画という場合、「ゲイ（レズビアン）の人間がゲイ（レズビアン）を題材にしてゲイ（レズビアン）のために作った映画」（とちぎ・釜,p50）ということをまず土台とする。そのうえで、「ゲイ（レズビアン）でない人間が作ったもの、広く一般の観客を対象とした作品でも、作品や作家に応じてくくって見た方がより良く評価できるだろうという場合には、これをゲイ&レズビアン映画と言っても構わない」（とちぎ・釜,p50）という。＊括弧内は著者の加筆

とちぎの言う「土台」の定義が、エルセッサーのいう「ある種の映画」に対応している。つまり、初期のゲイ&レズビアン映画祭は、閉じられた空間であったといえる。

しかし最近の傾向として、クィア映画祭は開放的な空間になりつつある。たしかに、開放的な映画祭になることで、異性愛者が同性愛者のことを理解する機会が得られる。だが、「異性愛社会とのコンタクトに成功すれば、それは、同時に主流化と同化の問題を引き起こし、当事者からの批判を寄せることになる」（菅野,2015,p206）。そのため、映画祭の運営側は、当事者だけに閉ざされたイベントであることを避け、かつ、彼らの存在を無視してはいけなないのである。菅野は、このように言う。

映画祭は、複合的で流動的な現象である。運営主体の組織化、資金の獲得、プログラミング、配給やマーケティング、上映形態や上映後のイベントの企画など、文化、経済、社会、政治の諸層が折り重なるようにして映画祭を構成している。こうした複合体としてある映画祭は、その制度的な側面からいっても「閉じた」性質でいることは困難であろう。（菅野,p206）

たとえクィア映画祭が「閉じた」性質を持ちえないとしても、セクシャル・マイノリティへの配慮

を忘れてはいけない。なぜなら、クィア映画祭は彼らにとって、「自己表象としてのイメージと語りとの出会い」(菅野,p206) の場だから。当事者だけに限らず、我々は皆、どのような人物になりたいか分からずに苦しみ、あるいは目指すべき人物像があっても、その漠然性に悩む。そこで物語の登場人物や、そこでの語りが重要な指針を与えてくれるのである。しかし、セクシャル・マイノリティの場合、自分たちを描いた物語は少ない。だからこそクィア映画が重要なのであり、それを皆が観ることのできるクィア映画祭が大切なのである。

第2章 3つの映画祭に参加してみても

我々は、実際にクィア映画祭がどのようなものなのかを考察するため、フィールドワークとして3つの映画祭に参加した。大きく分けて、クィア映画祭とスタンダードな映画祭という2種類である。

クィア映画祭としては、レインボーリール東京と関西クィア映画祭に参加した。日本ではその他にも、青森国際 LGBT フィルム・フェスティバル、大須にじいろ映画祭、愛媛 LGBT 映画祭、福岡レインボー映画祭などのクィア映画祭がある。理想はすべてを回ったうえで各映画祭を比較することであったが、諸事情により一部を断念し、二つの映画祭を比較することでクィア映画祭についての理解を深めてゆくことにした。

スタンダードな映画祭としては、東京国際映画祭へ訪れた。これは、クィア映画祭という一つのジャンル内での比較のみでは、映画祭の捉え方に偏りが生まれ、クィア映画祭というジャンルについて明確な定義ができないと考えたためである。

参加した3つの映画祭について比較するうえで、相互の比較を行いやすくするため、各映画祭をいくつかの項目に分けて要約した。各映画祭の歴史、我々の鑑賞した作品、講演会の有無、劇場外の設備、観客、印象を比較項目として設定した。なぜこれらの項目にしたのかは、次のような理由による。歴史と鑑賞作品は、事実を紹介するため。講演会の有無は、映画祭のイベントとして上映以外のものがあるのかを記述するため。劇場外の設備は、祭りとして、映画の上映以外にどのようなことがされているかを比較するため。観客は、エルセッサーも述べているように、映画祭において重要な要素であるためであり、具体的には、どのような年代、セクシャリティの方が来られるのかを記述した。印象は、一観客として現場で感じたこと、考えたことを記述し、のちに比較するため。

本章では、レインボーリール東京、関西クィア映画祭、東京国際映画祭の順に記述していく。

第1節 レインボーリール東京

・歴史：まず、レインボーリール東京は1992年に始まったもので、当時は、「東京国際レズビアン&ゲイ・フィルム・フェスティバル」であった。会場は、中野サンプラザ6階研究室だった。上映期間は3日間。それから27回目にあたる今年は、青山のスパイラルホールで開催された。上映期間も6日間と、26年がたち、その規模は大きくなっている。

・鑑賞した作品：14日には、『テルアビブの女たち』(原題：Bar Bahar 監督：マイサルーン・ハムード 2016)、『傷』(原題：Inxeba 監督：ジョン・トレンゴーフ 2017)を。15日には、『QUEER×APAC

～APQFFA 傑作選 2018～』（『新入生』（英題：First Day 監督：ジュリー・カルセフ 2018）、『言葉にできない』（英題：Sisak 監督：ファラズ・アリフ・アンサリ 2017）、『繭』（原題：茧 監督：メイ・リーイン（梅麗瀾）2017）、『ルッキング・フォー？』（原題：你找什麼 監督：チョウ・トンイェン（周東彦）2017）を含む）、それから、『アリフ、ザ・プリン（セ）ス』（原題：阿莉芙 監督：ワン・ユーリン（王育麟）2017）を鑑賞した。

・講演会の有無：有（しかし、今回観た作品には特別講演会がなかった。）

・劇場外の設備：グッズ売り場、カウンターバー、撮影スポット、アンケートコーナー。

グッズ売り場には、レインボーリールのバッジや、LGBTに関する本、その他雑貨が売られていた。カウンターバーでは、上映の前後に観客が集まり、談話をしていた。撮影スポットがあり、インスタ映えのする工夫が見られた。さらに、アンケートコーナーでは、HIV 感染に関する知識を観客に尋ね、回答者には避妊用具を配っていた。

・観客について：運営側が観客の内の 554 人を対象に実施したアンケート（1）（2017 年 7 月 8 日～17 日実施）によると、20 代、30 代、40 代はそれぞれ 20%以上であった。会場が東京ということもあって、関東住まいの観客が約 75%にもおよんだ。

・印象：非常に明るい雰囲気。エルセッサーは、映画祭と儀礼が比較可能なものとしていたが、この映画祭は、ある意味、儀礼的であったと言えるだろう。時には笑い声が会場を包んでいたり、上映後も拍手で幕を閉じていた点で、映画祭のある種の作法がみられたからである。それは、映画祭はどれもこのようなものだからなのか、それとも国際都市、東京という地域性がこの作法にも影響をしているのか。あるいは別の要因があるのか。レインボーリール東京に参加して、このような疑問が生まれた。

第2節 関西クィア映画祭

・歴史：関西クィア映画祭は 2005 年より毎年開催されている。実は、東京国際レズビアン＆ゲイ・フィルム・フェスティバルは 1996 年から 2000 年の間、関西でも開かれていたのだが、2001 年から再び東京のみの開催になった。関西クィア映画祭は、2005 年にそれが復活したものだ。今回のクィア映画祭の会場はすてっぷホール（とよなか男女共同参画推進センターすてっぷ）（9/22(土) 23(日) 24(月) 実施）と、京都大学 西部講堂（10/19(金) 20(土) 21(日)実施）である。

・鑑賞した作品：10 月 21 日上映の、『わたしの居場所 新世界物語』（監督：武田倫和 2017）これは、ドキュメンタリーである。

・講演会の有無：有 この作品の講演会として、映画の監督と主演の 2 人が登壇し、司会者の質問に答えたのち、観客からの質問を募ってその場で返答していた。司会者の質問は、主人公へ”Mr.”か”Ms.”の、どちらで呼ばれることを好むか、というもの。監督へは、本作と次回作に関する質問があった。観客からの質問は、詳しくは書けないが、作中の主人公の行動の意図について尋ねるものや、いつ性自認をしたか、あるいは主人公へ感想を伝えるものがあった。20 分ほどの講演会であ

ったが、作品の理解をさらに深めるだけでなく、トランスジェンダーの主人公を中心として本音で話し合う場でもあった。

・劇場外の設備：10分500円のヘッドマッサージ、映画祭関係者のおすすめの書籍コーナー、グッズ販売、軽食の販売、映画祭期間限定の、男女隔てなく誰でも入れるトイレがあった。映画祭実行委員のおすすめの本が並べられており、観客は自由に閲覧することができる。マンガや雑誌、新聞記事や小説、評論など、さまざまなジャンルの「クィア」にまつわる本があり、観客は自分の好みに合わせてクィアへの理解を深められる。さらに、この西部講堂の最寄りトイレでは、映画祭期間限定で男女トイレを「みんなのトイレ」として開放していた。

・観客について：外国人の方、学生のカップル、学生などが目立ったそう。やはり会場が京都大学ということもあり、レインボーリールと比較すると、学生の割合が多め。

・レインボーリールの時に感じた儀礼的な印象は薄かった。

ただし、運営主体が学生であることや、会場がくつろぎやすかったことでアットホームな雰囲気だった。

第3節 東京国際映画祭について

・歴史：東京国際映画祭とは、日本で唯一の国際映画製作者連盟公認の映画祭である。1985年、日本で初めて大規模な映画の祭典として誕生した東京国際映画祭は、日本及びアジアの映画産業、文化振興に大きな足跡を残し、アジア最大級の国際映画祭へと成長した。特筆すべき点としては、映画クリエイターの新たな才能の発見と育成に取り組んできたという点、セミナー、シンポジウムやワークショップなど多数開催し、フォーラムやマーケットと連動を意識した参加交流型フェスティバルとして人と映画、ビジネスのリンケージを実現しているという点があげられる。

・鑑賞した作品：コメディ映画（『お熱いのがお好き』監督：ビリー・ワイルダー 1959年）、（『ノン・フィクション』監督：オリヴィエ・アイヤス 2019 一般公開）を鑑賞した。会場は、今まで参加した映画祭とは異なり、六本木ヒルズの TOHO シネマズという映画館、EX シアター六本木、東京ミッドタウン日比谷、東京国際フォーラム、神楽座であった。

・講演会の有無：有り

・劇場外の設備：グッズ販売、壇上トーク、授賞式、シンポジウム

・観客について：外国人の方、学生の方、大人の方と幅広かった。上映される演目によって観客の年齢層が異なっていた。

・会場や、会場付近の雰囲気は、映画祭と聞いて、多くの人が想定するような、豪華なものであった。観客は、学生から大人まで、また海外からの方も多かった。作品によっては、上映開始前に壇上トークを行っているものがあり、女優や監督から映画作品の醍醐味について聞くことができる機

会が提供されていた。

第 4 節 3つの映画祭に参加して

一口に映画祭と言っても、上映作品や、会場、実行委員会の目的、観客など、さまざまな要素が互いに異なるため、映画祭全体の雰囲気も異なるように見える。

この違いはどこからくるのか？ 先行研究からも明らかなように、映画祭には地域性や資金など、様々な要素が複雑にからみあっているためこの違いについて論じるのは容易ではない。私たちは、映画祭実行委員の立場からみた映画祭のテーマが雰囲気づくりに大きな影響を及ぼしていると考え、映画祭の比較を行った。

第 3 章 映画祭比較

第 3 章では、各映画祭で感じ取った違いがなぜ生じるのかを明らかにしようと試みた。その手法として、日本で開催されているクィア映画祭を特定の項目で比較することによって、何が映画祭の違いを生み出すのかについて考えることにした。この比較項目の問いは、1.映画祭の目的は何なのか、2.どのような方を対象にしているのか、というものである。映画祭ごとに生じる雰囲気の差とは、それぞれの映画祭の作り手が意図している目的の異なりから生じるのではないかと考え、1.の質問を行った。また、映画祭によって異なる雰囲気は、観客の拍手、鑑賞する態度や映画上演前のロビーでの対話などから感じ取ったので、2.の質問を行った。

第 1 節 比較内容

各地方で行われているクィア映画祭において以下の項目で比較を行った。

1.映画祭の目的。

2.対象とする観客。

以下にその内容を映画祭別に記載する。内容は、各映画祭のホームページの該当箇所を参照したが、該当箇所が見当たらなかったものに関しては、映画祭の関係者に問い合わせを行った。

第 2 節 比較の結果

レインボーリール東京

1. レズビアンやゲイについての作品に留まらず、トランスジェンダー、インターセクシュアル、バイセクシュアルといった、さまざまなセクシュアル・マイノリティについての作品上映を通じて、より多様で自由な社会を創出する場となることを目指すとともに、セクシュアル・マイノリティをテーマとする作品は劇場公開される機会が少ないことから、そうした国内外の作品を紹介することで映像文化創造に貢献すること。

2.あらゆるセクシャリティを持つ人。

第 27 回レインボーリール東京～東京国際レズビアン&ゲイ映画祭～

(最終閲覧日：2018 年 12 月 13 日) <http://rainbowreeltokyo.com/2018/>

関西クィア映画祭

1. もう既に「男女という制度」の枠組みから出て、自分らしい性を生きている人たちが、沢山いる。典型的であってもなくてもいい。変(=クィア/queer)でもいい。性のあり方は多様だ。私たちは生きていける！「クィア」を切り口に「性」をテーマにした映像作品を上映する関西クィア映画祭は、そんなメッセージがあふれる「みんなのお祭り」という趣旨を持っている。

2.すべての人

第 12 回関西クィア映画祭

(最終閲覧日：2018 年 12 月 13 日) <https://kansai-qff.org/2018/index.html>

青森インターナショナル LGBT フィルムフェスティバル

1. 多様な性を考える映画祭である。LGBT とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字を取ったもので、セクシュアルマイノリティ（性的少数者）の総称として一般的に使われている。LGBT 映画を通して、人権を考え、あらゆる人々が人権を享受できる社会をめざすことを趣旨とする。

2. 全ての人。

第 13 回青森インターナショナル LGBT フィルムフェスティバル (最終閲覧日：2018 年 12 月 13 日) <http://aomori-lgbtff.org>

大須にじいろ映画祭

1. 映画を通してすべての人が自分らしく生きられる社会になれるようにすること。

2. すべての人

大須にじいろ映画祭 (最終閲覧日：2018 年 12 月 13 日) <http://osurainbowfilmfestival.org>

3 節 比較内容の考察

1.の項目に関しては、あらゆる人が平等な権利を得るための社会運動的な側面を目的としているもの、男女の区別のみならず性の多様性を承認することを目的としたもの、「みんなのお祭り」ということを目的としたものなど、映画祭によって結果が異なるものであった。

2.の項目に関しては、全ての人を対象としているというものであり、ある特定のターゲットに絞っているわけではないという回答が多くを占めていた。観客についてだが、以前は、セクシャル・マイノリティーの監督が自分と同じ境遇の人を対象としていた。しかし、実際に現在行われているクィア映画祭では、セクシャル・マイノリティーだけにとどまらず、全ての人を対象としているので、以前とは観客の対象が異なり、映画祭が閉じた空間ではなく、開放された空間へと変化しているのだろう。

2.の回答がすべての映画祭で一致していた結果から考慮すると、観客ではなく、1.の質問項目である、各映画祭における趣旨の違いが、映画祭による違いを生み出したのではないのかと言える。しかし現時点では、実際に映画祭に参加してみて感じた疑問について明らかになっただけであり、本研究の目的である、クィア映画祭がどれほどSOGIの理解を深めるのかということに関しては明らかになっていない。

第 4 章 世界でどのようにクィア映画祭が取り上げられているのか。

第 1 節

クィア映画祭がどれほどSOGIの理解を深めるのかという目的を明らかにするため、クィア映画祭が、人々の考えや行動、また、社会にどれほど影響を及ぼしてきたのかを、世界で行なわれている映画祭を取り上げたホームページや記事から考察する。
以下にその結果を記す。

1. The Ljubljana Gay and Lesbian Film Festival リュブリャナ（スロベニア）

スロベニアの首都であるリュブリャナで開催されている、ヨーロッパ（世界）で最も古い、ゲイ、レズビアン国際映画祭、The Ljubljana Gay and Lesbian Film Festival についての記事である。リュブリャナ ゲイ・レズビアン映画祭は、街の LGBT アーティストや運動家に捧げられ、非政府団体によって組織され、今日の街の顔となりリュブリャナに貢献し続けている。

Europe's oldest LGBT Film Festival（最終閲覧日：2018 年 12 月 13 日）

<https://kongres-magazine.eu/2018/11/toldest-europe-lgbt-film-festival-ljubljana/>

2. Kashish Mumbai international Queer Film Festival ムンバイ（インド）

Kashish Mumbai international Queer Film Festival は、インド初で、インド唯一の、メインストリームシアターで開催される LGBTQ クィア映画祭である。今では東南アジア最大の映画祭となっている。この映画祭は、無限の多様性、ジェンダーを祝し、社会的な差別に対して抵抗し、平等な権利を

勝ち取るということを趣旨としている。インドでは、今まで同性愛は法律により禁じられていたが、今年の 9 月に法律上認められた。法律改正は、平等な権利を勝ち取るという趣旨と近いこともあり、クィア映画祭が法律改正を行うことになった一因とも考えられる。

KASHISH Mumbai International Queer Film Festival 2018-Call for Submissions (最終閲覧日 : 2018 年 12 月 13 日) <https://www.lgbteventsindia.com/kashish-mumbai-international-queer-film-festival-2018-call-for-submissions/>

3. FiveFilms4Freedom

この映画祭は、LGBTQ をテーマとしたショートフィルムをオンライン上で見ることができるというものである。オンラインというコンセプトは、自由と平等な権利が制限されている場所の人々が LGBTQ 映画を見ることを奨励するためのものであり、#FiveFilms4Freedom を用いることで、全世界にいるオンライン上の観客に「愛することは人間の権利なのではないか。」という問いかけへの答えを求めている。#FiveFilms4Freedom:

a global LGBTQ+ short-film celebration (最終閲覧日 : 2018 年 12 月 13 日)
<https://www.britishcouncil.org/fivefilms4freedom>

4. Pride International Film Festival マニラ (フィリピン)

この映画祭は、HIVとエイズについての意識と教育を主張することを趣旨としている。また、映画祭に関するイベントでは、HIVやエイズに関する様々な運動が行なわれている。一部の映画祭の収入は、HIV、エイズのサポートを行う非政府組織や人々へ寄付される。

PRIDE INTERNATIONAL FILM FESTIVAL IN MANILA, PHILIPPINES (最終閲覧日 : 2018 年 12 月 13 日) <http://beabroda.com/philippines/pride-international-film-festival-in-manila-philippines-2004-including-complete-schedule/>

5. Vancouver Queer Film Festival バンクーバー (カナダ)

毎年八月に行なわれており、11 日間に渡り、カナダの美しい山と海の景色を背景に、映画、パフォーマンス、そしてオンラインイベントやパーティーが行われる。そこでは、クィアの人が自分自身を見つけ出すまでの道のりなど、クィアの人々の人生に焦点を当てた映画を取り上げている。Vancouver Queer Film Festival では、ステレオタイプと対峙するすべてのジャンルの作品を追求し、境界を取り払い、多様なアーティストにハイライトを当てている。また、毎年ブリティッシュコロンビアで作られた短編映画作品のいくつかは、The Coast is Queer で毎年上映される。

Vancouver Queer Film Festival (最終閲覧日 : 2018 年 12 月 13 日)
<https://queerfilmfestival.ca/film/>

[Film Freeway](#) (最終閲覧日: 2018 年 12 月 13 日)

<https://filmfreeway.com/VancouverQueerFilmFestival>

第 2 節

世界で行なわれているクィア映画祭について調べた結果、開催の目的は、国によって異なっていた。映画祭の対象とする観客に関しては、日本とは異なり、限定している場合と、限定していない場合に二分化された。また、日本の映画祭では、クィア映画を公の一般施設で鑑賞できるということを前提として社会への呼びかけを行っていたが、その前提が成り立っていない人々への呼びかけをオンライン上で行っている映画祭もあった。このように、クィア映画祭が行なわれている国によって、クィア映画祭の目的、対象や手法が異なっており、その違いは各国の社会情勢下に合わせて SOGI の理解を進めるために生じたものではないだろうか。

第 5 章 まとめ

以上、が我々の調査結果である。第 1 章では、「クィア映画祭」とはどのようなものかを、「クィア」と「映画祭」の語の説明から始めた。第 2 章では、日本で実際に開かれている映画祭に参加し、その様子や考察についてまとめた。第 3 章では、フィールドワークを受けて、映画祭の雰囲気づくりに、映画祭のテーマが大きく影響していると考え、日本国内で開催されているクィア映画祭のテーマ、そしてどのような観客を対象としているのかについて調査した結果をまとめた。第 4 章では、日本のクィア映画祭について調査したことを受け、世界のクィア映画祭がどのようなものがあるかを調査し、特筆すべきものをここに記した。

クィア映画祭は、様々な要素が幾重にも重なっている。我々がここで紹介したのは、クィア理論的視点、「祭り」からの視点、一観客としての視点、映画祭のテーマ性に着目した視点である。これはほんの一部にすぎず、経済的な視点、法律的な視点、美学的な視点など、他にもまだまだ着目すべき要素がある。その中でも特に、公共圏に着目した視点を調べる必要性があったように思う。ロイストが述べているように「観客が映画をみる過程は映画祭の創り出す枠組みにしたがっている」(Loist, p.197) ため、映画祭が創り出す空間について調べることで、SOGI に関する理解のプロセスを調べられるからだ。

攪乱の可能性を秘めたクィア映画祭。この催しが広範囲に行われていけばいくほどに、映画祭の方向性は重要なものになっていく。誰に向けた映画祭にするのか。どんなプログラムを組むのか。日本では、一般向けに空間を開放する動きがあるが、それが本当に良いことなのか。それを知るには今後とも見守っていかねばならない。なぜなら、ここでは何が起るのか、誰も分からないのだから。

最後に、本論文を作成するにあたって映画祭会場で質問に答えていただいた方々。そして、研究のアドバイザーを引き受けていただいた東志保助教に心より感謝いたします。

主要参考文献

- ・ ジュディス・バトラー (竹村和子 訳) (1999) 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 (青土社)
- ・ ミシェル・フーコー (渡辺守章 訳) (1986) 『性の歴史 I 知への意志』 (新潮社)
- ・ イヴ・コゾフスキー・セジウィック (外岡尚美 訳) (1999) 『クローゼットの認識論 セクシュアリティの 20 世紀』 (青土社)
- ・ 河口和也 (2003) 『クィア・スタディーズ』 (岩波書店)
- ・ 田崎英明 (2000) 『ジェンダー/セクシュアリティ』 (岩波書店)
- ・ Thomas Elsaesser (2005) “*European Cinema: Face to Face With Hollywood*” (Amsterdam Uni Pr)

- ・ Skadi Loist (2014) ”*Queer Film Culture: Performative Aspects of LGBT/Q Film Festivals*”
<https://d-nb.info/1071948296/34>
- ・ 菅野優香 「クィア・LGBT 映画祭試論 映画文化とクィアの系譜」『現代思想』2015 年 10 月号 pp.202-209 (青土社)
- ・ とちぎあきら・釜利子 「レズヴィアン・フィルムの現在・過去・未来」『銀星倶楽部 17』1993 年 p50 (ペヨトル工房)
- ・ アン・ペレグリーニ (新宅美樹・安岡真 訳) (2000) 「立ち上がれ女性たち。男たちは脇へ。けれど勇敢な人もいる。－黒人であること、レズビアンであること、そして目に触れるということ」『視覚文化におけるジェンダーと人種－他者の眼から問う－』 (発行・彩樹社/発売・星雲社)

